沈黙と孤独

――シェリー『モンブラン』を読む

松島正一

（1）

パーシー・ビッシュ・シェリーの『モンブラン』（“Mont Blanc”）という詩は一八一六年七月下旬、シェリー、メアリ、クレアがアルプス山中シャモニの谷を訪れたときに作られた。『シャモニの谷にて書かれた詩行』（“Lines Written in the Vale of Chamouni”）という副題が付いている。

シェリーは友人T・L・ピーコック宛の手紙（七月二十二日付）でこの時の体験を生き生きと描いている。

我々一行はその無限の空間が想像力を仰天させるほどの山々の間をうねりながらり登っていった。…セルヴォからシャモニまでは、まだ三リーグあった。モンブランが目の前にあった。アルプス山脈は高所の至る所に無数の氷河があり、複雑にうねる一つの谷を囲い込んでいた。森は筆舌に尽くしがたいほど美しく、その美しさにおいて荘厳であった。…モンブランは目の前にあったが、雲で覆われていて、恐ろしい裂け目の入った山裾だけが

見えた。雪の高峰は耐えられないほど美しく、モンブランと連なる一部を成し、高い所で時折雲間から輝く姿を現すのであった。私はこれまで山脈とはどういうものか知らなかったし、想像したことがなかった。空中に聳える巨大な頂が突然目の前に出現した時、狂気と同類のエクスタシーに似た驚嘆を引き起こした。どこを見てもみな同一の風景であったことを忘れないでほしい。それは我々の敬意と我々の想像力に強く迫ってきたのだ。…我々自身を占拠した感動は、おそらく他の人が感じたことがないであろうような特別なものだった。自然は、その和合が我々の精神を最も神聖な者の精神よりも息をつけない状態にする詩人だった。

この手紙はシェリーが自然という素材をどのように哲学的に利用して、現実意識を決して失わない『モンブラン』という形而上詩に仕上げたかを示している。この詩『モンブラン』が『六週間の周遊記』（一八一七）で発表された時、シェリーは「序文」でこう記している。

この詩は記述しようとする対象によって引き起こされた深く力強い感情の直接の印象のもとで製作された。魂の規律のない流出として、手なずけられない荒野と近づき難い厳粛さを、これらの感情が生ずるものから模倣しようとする試みに認可への主張を拠っている。

「深く力強い感情の直接の印象」という表現はワーズワスを思わせる。この詩は本質的に自然ではなく哲学に関心があるので、シェリーが記述的な面を強調しているのは、明らかに注意を反宗教的な自然から引き離す試みである。「規律のない流出」という言葉で、詩人は『モンブラン』の明解でない、混乱した記述を自己弁護している。

ところで、シェリーの『モンブラン』にはコウルリッジの二つの作品からの借用がある。その一つは『シャモニの谷にて日の出前の讃歌』（“Hymn before Sunrise in the Vale of Chamonouni”）であり、シェリーは『モンブラン』の副題で使っている。

シェリーはシャモニを訪れたのだが、実はコウルリッジはそこを訪れてはいなかった。さらに、コウルリッジの作品は実はドイツの詩人の『シャモニに寄せるオード』に基づいていたことが、トマス・ド・クインシーの証言によってわかる。

シャモニへの讃歌は、以前は娘時代の名ミュンターで世に知られていたドイツの女流詩人フレリカ・ブルーンが同じ主題について何連かに分けて詠んだ詩を拡張したものである。詩の骨格に限っては全く同じ—あの王の如く荘厳な山（モンブラン）の最も印象的な相貌に向かって、その生みの親たる神を称えるよう懇願しながらの訴えかけ—である。例えば、川の奔流は、まっさかさまに荒れ狂って流れ落ちるさなかに動きを止められ、まるで硬直を引き起こす死神の手に触れたといわんばかりに、強張って永劫かわることなき氷柱と化してしまうのは誰のせいなのか言うように求められる。そして、この熱烈な頓呼（アポストロフィ）に対する答えも、もとの詩と同じく合唱隊（コロス）の発するかのような歓喜の迸りによってなされる。それゆえ、筋に限っては、また場面設定についてさえも、コウリッジの詩は翻訳である。（藤巻明訳『湖水地方と湖畔詩人の思い出』）

ド・クインシーはコウルリッジを批判しているかと思いきや、続いて彼を誉めたたえるのである。

ところが一方で、幾つかの主題を思慮分別のあるやり方で広げることにより、また抒情的熱狂を帯びたはるかに深みのある調子により、輪郭にすぎなかったドイツ語の原詩の干からびた骨格が、コウルリッジのおかげで生まれ変わって溢れんばかりの生命力を帯びている。それゆえ、これは原作の言い換えではなくて、練り直しである。となれば、このことを本人が率直に認めたとしても、ものの分かった人々のあいだでのコウルリッジの評判に傷が付くなどとは思いも寄らなかったはずである。

コウルリッジの『シャモニーの谷の日の出前の讃歌』は八十五行から成る讃歌であるが、第一連を見てみよう。

初めに「モンブランの麓に源を発するアルヴとアルヴェイロンの二つの川の他に人目につく五つの急流が山腹を下り氷河に数歩入った所に、おびただしい数のリンドウが〈この上なく美しい空色の花〉をつけていた」と記され、詩はこう始まる。

Hast thou a charm to stay the morning-star
In his steep course? So long he seems to pause
On thy bald awful head, 0 sovran Blanc,
The Arve and Arveiron at thy base
Rave ceaselessly; but thou, most awful Form!
Risest from forth thy silent sea of pines,
How silently! Around thee and above

Deep is the air and dark, substantial, black,
An ebon mass: methinks thou piercest it,
As with a wedge! But when I look again,
It is thine own calm home, thy crystal shrine,
Thy habitation from eternity!
0 dread and silent Mount! I gazed upon thee,
Till thou, still present to the bodily sense,
Didst vanish from my thought: entranced in prayer
I worshipped the Invisible alone.

汝は険しい道を行くあの明けの明星を停める
魅力があるのか。とても長いこと星は留まっているようにみえる、
汝の剝き出しの畏敬すべき頭上に。おお至高の白峰よ！
アルヴとアルヴェイロンの二つの川は汝の足元で
休むことなく狂乱する。だが汝、いと畏敬すべき姿よ！
汝は松林の静かな樹海より聳える、
なんと静かに！　汝の周り汝の上方に
空は深く、暗く、厚く、黒く
黒壇の一団のようだ。思うに汝は空を貫く、

楔でするように！　だが再び眺めると、
空は汝の穏やかな家、汝の水晶の宮居、
汝の永遠の住処だ！
おお恐ろしく静かな山よ！　私は汝をじっと見つめた、
汝はなほこの官能には浮かんでいるけれど、
つひに私の想念よりは消え失せた。祈りに我を忘れて
私は見えないものだけを崇拝した。

シェリーがコウルリッジから借用したと思われるもう一つの作品は『クブラカーン』である。『クブラカーン』はバイロンの要請でその夏に出版されたが、シェリーは『モンブラン』を書き終えた一ヶ月後になってやっと手に入れた。バイロンは『クリスタベル』の一部を記憶していて、六月一八日にシェリーにそれを暗唱した。バイロンは『クブラカーン』を読んでいたので、それをも暗唱したかもしれない。「クブラカーン」の「この裂け目から、絶えずふつふつと煮えたぎり」（“And from this chasm, with ceaseless turmoil seething”l.17）とか、「森や谷を抜けて聖なる川は流れ、やがて人間には計り知れない洞窟に達し、音を立てて生命のない海に沈んだ」（“Through wood and dale the sacred river ran,/Then reached the caverns measureless to man,/And sank in tumult to lifeless ocean.” ll. 26-28）を「モンブラン」の一二〇～一二六行と比べてみると、その影響は明らかである。

『モンブラン』は、山の崇高な力を扱っているが、山を扱った作品としてワーズワス『序曲』のスノードン山（第一四巻）、シンプロン峠（第六巻）がある。また、風景とそこに佇む人間ということでは、ワーズワスの『テインタ

ン・アベイ』の主題と重なるであろう。シェリーはエドモンド・バークの『崇高と美の観念の起源に関する哲学的考察』（一七五七）を読んでいたはずだから、バークの崇高理念に大いに影響されていたと考えられる。また、『モンブラン』と同時期に書かれた『理想美への讃歌』（“Hymn to Intellectual Beauty”）では美の精神の「畏敬すべき力」が扱われているので、二つの作品を一緒に読むことで『モンブラン』の理解が深まるであろう。

（2）

『モンブラン』は全五連からなるが、第一連は次にように始まる。

The everlasting universe of things
Flows through the mind, and rolls its rapid waves,
Now dark—now glittering—now reflecting gloom—
Now lending splendour, where from secret springs
The source of human thought its tribute brings
Of waters, —with a sound but half its own,
Such as a feeble brook will oft assume
In the wild woods, among the mountains lone,
Where waterfalls around it leap for ever,

Where woods and winds contend, and a vast river
Over its rocks ceaselessly bursts and raves. (ll. 1–11)

事物の永遠の宇宙が
精神のなかを流れ、急流を押し進める、
暗くなったり、輝いたり、暗黒を映したり、
光を与えたりし、そこでは秘密の水源から
人間の思想の源泉が貢物の水を捧げる、
半ばそれ自身の音を奏でながら。
そのような弱々しい小川はしばしば
野生の森、寂しい山の中で衒(てら)う。
そこでは滝がそのあたりを永遠に飛び跳ね、
森と風とが相争い、巨大な川は
絶え間なく岩石の上に飛び散り、荒れ狂う。

これは情景の描写ではなく、事物と精神界とのかかわりについての詩人の瞑想である。最初の二行の力点が「永遠の宇宙」にあるのか、「精神」にあるのかという点、つまり二行目の「精神」が事物の精神なのか、人間の精神なのかについて議論がある。事物の宇宙が「その宇宙の精神」を通って流れるのか、「人間の精神」のどちらを通って流れるのか、ということである。訳は一応、「精神」を人間の精神と捉えておいた。

宇宙は受動的な「流れ」であって、精神と宇宙の関係における重要な要素は精神によって増加する。この宇宙は「弱々しい小川」のようなもので、「巨大な川」や他の自然物の音を反響し、混ぜ合わせることによってその音を増すのである。人間の精神は「弱々しい川」で川が反響する周囲の景色は宇宙である。アルブの川は事物、アルブの峡谷は精神に対応する。詩人は自然の音を聞き、精神と精神の中を流れる過ぎていく感覚印象を、谷と谷を流れる川に喩えているのである。比喩というのは普通、抽象的なものを具体的に表現するするために用いられるものであるが、シェリーの場合はこの逆であることが多い。このことがシェリーの詩作品を難解なものにしている。

さて、第二連である。

Thus thou, Ravine of Arve—dark, deep Ravine—
Thou many-coloured, many-voiced vale,
Over whose pines, and crags, and caverns sail
Fast cloud-shadows and sunbeams: awful scene,
Where Power in likeness of the Arve comes down
From the ice-gulfs that gird his secret throne,
Bursting through these dark mountains like the flame
Of lightning through the tempest; (ll. 12–19)

このように、汝、アルブの峡谷よ—暗く深い峡谷よ—
汝、多くの色と多くの声に満ちた谷よ、

その松の木々、崖や洞窟の上を
雲の影と太陽の光線が足早に飛んで行く。畏しい景色だ、
そこには、「力」がアルブ川となって、
秘密の玉座を囲む氷の湾から流れ下る。
嵐の中の稲妻の閃光のように
この暗い山脈を駆け抜ける。

第二連は「このように汝、アルブの峡谷よ」と、呼びかけで始まり峡谷への詩人の反応を描く。「このように」で示されているように、第一連と第二連はパラレルな関係になっている。第一連は精神の自然に対する反応についての哲学的な陳述の叙述であり、詩人にもモンブランにも特別の関係はない。第二連は詩人と彼の眼前の風景との関係についての陳述を詳細に述べている。

峡谷は様々な「事物の永遠の宇宙」を表わし、「多くの色と多くの声」であり、第一連の「巨大な川」がアルブ川である「力」であり、風景を形成していることがわかる。シェリーの詩によく現われる「松の木」は障害に直面しても一貫性を保つ人間性の価値を象徴している。

—thou dost lie,
Thy giant brood of pines around thee clinging,
Children of elder time, in whose devotion

The chainless winds still come and ever came
To drink their odours, and their mighty swinging
To hear—an old and solemn harmony;
Thine earthly rainbows stretched across the sweep
Of the aethereal waterfall, whose veil
Robes some unsculptured image; the strange sleep
Which when the voices of the desert fail
Wraps all in its own deep eternity; —
Thy caverns echoing to the Arve's commotion,
A loud, lone sound no other sound can tame;
Thou art pervaded with that ceaseless motion,
Thou art the path of that unresting sound— (11. 19–33)

汝はそこに在る。
汝の松の木々の巨大な種属を汝の周りにからみつかせて。
古の子どもたちはその献身の中で
鎖に縛られていない風は昔も今も、絶えずやって来る。
その香気を飲み、その巨きな揺れ動き、
荘厳な古い調べを聞くために。

汝の地上の虹が、天から流れ落ちる滝を横切って
架かっている。そのヴェールが
彫刻したのではないあるイメジを覆い隠す。
不思議な眠りが、荒野の声が止むとき、
それ自身の深い永遠の中ですべてを包む。
アルブの混乱に反響する洞窟、
どんな音も手なづけられない大きな寂しい声。
汝はあの絶え間のない動きに満たされ、
汝はその休みない音の小径だ。

「その香気を飲み」という表現に見られるように、シェリーの共感覚（Synesthesia）が見事に描かれている。共感覚とは、たとえば、音の刺激が嗅覚、味覚、触覚、視覚のような関係のない感覚の中で、付加的な反応を喚起するまれな現象をいう。『理想美への讃歌』では「なぜ陽光がいつまでもあの谷川のうえに虹を織らないのか」（一八行）とあったが、ここでは滝を横切って希望の象徴である虹が架かっている。

Dizzy Ravine! and when I gaze on thee
I seem as in a trance sublime and strange
To muse on my own separate fantasy,

My own, my human mind, which passively
Now renders and receives fast influencings,
Holding an unremitting interchange
With the clear universe of things around; (ll. 34–40)

目もくらむような峡谷よ！　汝を見つめると
私は崇高で不思議な恍惚のうちに
自分自身の空想に思いにふけるように思える。
私自身の、私の人間らしい精神がすばやく影響を
受動的に与えたり受け取ったりしながら
周囲の事物の明晰な宇宙と
間断なく交換する。

依然として、「アルブの峡谷」を「汝」と呼びかける。ここで「受動的に」(passively) という語をどうとらえるか。「受動的に受け取る」は可能だが、「受動的に与える」とはパラドックスなのか。コウルリッジは「我々は与える物だけを受け取る」(『失意のオード』) と述べている。

詩人が自分自身の存在について考えるとき、彼はそれが「周囲の事物の明晰な宇宙と間断なく交換するすばやい影響」を受動的に受け、それから映し出すことに気づくのである。

One legion of wild thoughts, whose wandering wings
Now float above thy darkness, and now rest
Where that or thou art no unbidden guest,
In the still cave of the witch Poesy,
Seeking among the shadows that pass by
Ghosts of all things that are, some shade of thee,
Some phantom, some faint image; till the breast
From which they fled recalls them, thou art there! (ll. 41–48)

一群の荒々しい思想、そのさまよう翼が
汝の暗黒の彼方を流れるかとおもうと、
精神あるいは汝が歓迎されざる客ではない所、
「詩」の魔女の静かな洞窟に憩い、
存在するすべての物の亡霊のそばを、
通り過ぎる影の中の汝の影を、ある幻を、
ある微かな姿を探すのだ。汝が逃げてきた
胸がそれらの影を呼び戻すまで、汝はそこに在るのだ。

詩人は「一群の荒々しい思想」と自分自身の精神の状態とを相等しいものとして示す。この region はそれ自身の

存在を客観的に見ることのできる自意識、存在するすべてのもののイメジや亡霊を、宇宙の精神の「ある影」を「詩の魔女の静かな洞窟」の中に探すことのできる自意識を形成する。四十三行の that はシェリーの精神と考えていいだろう。個人の精神と「汝」（＝自然の背後にある力）との間につながりを打ちたてることができるのは、詩の洞窟の中に一緒に住む過程を通してである。

シェリーは宇宙の状態を能動的な印象が、すべての感覚知の創造を含む受動的な宇宙の精神に突き当たるものとして描いてきた。精神と物質の相互作用から第三の質、つまりその本性を意識的に問う人間の精神が生じてきた。しかし、それは実に弱々しく制限されているので、その本性の秘密を掘る人間精神の手段は、宇宙の精神の無意識の領域に跳び込むことである。この深淵こそが詩的霊感の源である。このことはシェリーの詩論である『詩の擁護』で詳細に述べられている。

シェリーは『モンブラン』を執筆していたころ、認識論的な懐疑主義の状態に陥っていたとも言われている。事物（things）という言葉で彼が言おうとしていたのは、未知の根源への激しい感覚であったのか。

第三連は詩人の瞑想である。

Some say that gleams of a remoter world
Visit the soul in sleep, —that death is slumber,
And that its shapes the busy thoughts outnumber
Of those who wake and live. —I look on high;
Has some unknown omnipotence unfurled

The veil of life and death? or do I lie
In dream, and does the mightier world of sleep
Spread far around and inaccessibly
Its circles? For the very spirit fails,
Driven like a homeless cloud from steep to steep
That vanishes among the viewless gales! (ll. 49–59)

ある人は言う。より遠くの世界からの微光が
眠っている魂に訪れる、死は眠りで
死の形は目覚め生きている者の
忙しい思想よりは数が多いと。私は高みを眺める。
未知の全能者が生と死を隔てるヴェールを
広げたことがあるだろうか。あるいは私が
夢の中にいて、より力強い眠りの世界が
遠くへ近づけないほど遠くにその輪を
広げるのか。というのも気力は挫ける、
見えない突風の中で消滅する
寄る辺ない雲のように追い払われて。

今や、霊感を受けた詩人は「生と死を隔てるヴェール」が未知の神によって持ち上げられたのか、それとも自分が宇宙の精神（＝集合的意識）の霊感が個人の精神を輝かせることのできる夢の中に捕らえられているのか、確信できないでいる。「ぼくは目覚めているのか、眠っているのか」（『ナイチンゲールへのオード』）と問うキーツと同じ状態に陥っている。

Far, far above, piercing the infinite sky,
Mont Blanc appears, —still, snowy, and serene;
Its subject mountains their unearthly forms
Pile around it, ice and rock; broad vales between
Of frozen floods, unfathomable deeps,
Blue as the overhanging heaven, that spread
And wind among the accumulated steeps;
A desert peopled by the storms alone,
Save when the eagle brings some hunter's bone,
And the wolf tracks her there— (ll. 60–69)

遠く、はるか上方に無限の空を突き通して
モンブランが現われる、—雪に覆われ、静かに、晴朗に—
その臣下たるその周りに

この世ならぬ氷や岩を積む。山々の間の広い谷は
凍った洪水、測り知れない深淵のあいだで広がり
風吹く垂れ下がる天のように青い。
鷹が猟師の骨を持ってくる時や、
狼がそこを通る時以外は
嵐しか来ない荒地—

モンブランが姿を見せる。ここで詩人は初めてモンブランの意味を理解する。頂上は「雪に覆われ、静かに、晴朗に」凍った、「嵐しか来ない荒地」、そこは狼に追われた鷹しか訪れない土地である。狼とは悪のヴィジョン、鷹とは人間の問い続ける精神と考えていいだろう。

how hideously
Its shapes are heaped around! rude, bare, and high,
Ghastly, and scarred, and riven. —Is this the scene
Where the old Earthquake-daemon taught her young
Ruin? Were these their toys? or did a sea
Of fire envelop once this silent snow?
None can reply—all seems eternal now. (ll. 69–75)

なんと恐ろしく
その形姿は折り重なっていることよ。粗野で、むきだしで、高く、
恐ろしく、傷つけられ、引き裂かれて。ここが
古の地震の悪霊がその子どもたちに「破壊」を教えた場所なのか。
これらが彼らの玩具だったのか。炎の海がかって
この静かな雪を包んだことがあったのか。
誰にも答えられない—今や、すべては永遠にみえる。

この絶対的な孤独を前にして、山と峡谷の歴史と運命とは何か、と詩人は問う。それは誰にも答えられない。ただ、山と峡谷がある。

The wilderness has a mysterious tongue
Which teaches awful doubt, or faith so mild,
So solemn, so serene, that man may be,
But for such faith, with Nature reconciled;
Thou hast a voice, great Mountain, to repeal
Large codes of fraud and woe; not understood
By all, but which the wise, and great, and good

Interpret, or make felt, or deeply feel.（ll. 76–83）

荒地は神秘の舌を持ち、
それが畏しい疑念か、温和で
厳粛で清浄な信念を教えるので、人間は
そのような信念を通してのみ自然と和解できるだろう。
偉大な山よ、汝は欺瞞と哀しみの大きな掟を
無効にする声を持っている。すべての人間には理解されないが
賢人、偉人、善人たちは
それを解釈し、感じさせられ、痛烈に感じるのだ。

荒地の「白さ」の伝えるメッセージは「畏しい疑念」なのか、「温和な信念」なのか。どちらかを教えてくれるのか。それとも両方を教えるということか。この両者は対立するものなのか、それとも同じものなのか。「畏しい疑念」とは山に対する従来の自然観のことなのか。「温和な信念」とは悪意あるように見える自然の様相と和解できるという確信なのか。But for を「〜がなければ」と解釈することも可能であるが、「〜を通してのみ」と解釈した。

山は宗教や神の制裁を主張する権威主義的な支配者のような「欺瞞と哀しみの大きな掟を無効にする」声を持っている。その声は「すべての人には理解されないが、賢人、偉人、善人たち」には感じとれるのだ。

そして、第四連で山のメッセージが述べられる。

The fields, the lakes, the forests, and the streams,
Ocean, and all the living things that dwell
Within the daedal earth; lightning, and rain,
Earthquake, and fiery flood, and hurricane,
The torpor of the year when feeble dreams
Visit the hidden buds, or dreamless sleep
Holds every future leaf and flower; —the bound
With which from that detested trance they leap;
The works and ways of man, their death and birth,
And that of him and all that his may be;
All things that move and breathe with toil and sound
Are born and die; revolve, subside, and swell. (ll. 84–95)

平野、湖、森、川、
大洋、入り組んだ大地の内部に住む
生きとし生けるもののすべて。稲妻、雨、
地震、火山の噴火、ハリケーン。
弱々しい夢が隠された蕾に訪れ、
夢さえ見ない眠りがあらゆる葉や花の未来を握る

冬眠の頃—あの忌まわしい恍惚から
それらがともに飛び出す躍動。
人間の営みと習い、それらのものの死と誕生、
人間のものと、人間の付属物のすべての死と誕生。
骨折って大騒ぎしながら動き、息するすべてのものは
生まれ、そして死ぬ。回転し、沈下し、膨張する。

地上のすべての創造物は、生まれ、そして死ぬという無常から逃れることはできない。それに対して「力」は崇高さの中にある。

Power dwells apart in its tranquillity,
Remote, serene, and inaccessible:
And *this*, the naked countenance of earth,
On which I gaze, even these primaeval mountains
Teach the adverting mind. The glaciers creep
Like snakes that watch their prey, from their far fountains,
Slow rolling on; there, many a precipice,
Frost and the Sun in scorn of mortal power

Have piled: dome, pyramid, and pinnacle,
A city of death, distinct with many a tower
And wall impregnable of beaming ice.
Yet not a city, but a flood of ruin
Is there, that from the boundaries of the sky
Rolls its perpetual stream; vast pines are strewing
Its destined path, or in the mangled soil
Branchless and shattered stand; the rocks, drawn down
From yon remotest waste, have overthrown
The limits of the dead and living world,
Never to be reclaimed. The dwelling-place
Of insects, beasts, and birds, becomes its spoil;
Their food and their retreat for ever gone,
So much of life and joy is lost. The race
Of man flies far in dread; his work and dwelling
Vanish, like smoke before the tempest's stream,
And their place is not known. (ll. 96–120)

「力」はその静けさの中で超然と住む。

遠く、清浄で、近づきがたく。
そしてこのことを、私はじっと見つめる
大地の表情が、この原初の山々が
注意深い精神に教えてくれる。氷河は
餌食を狙う蛇のように這う。その遠い源から
ゆっくりと回りながら前進する。そこで、数多くの崖を
霜と太陽とが人間の力を嘲るかのように、
積み上げた。ドーム、ピラミッド、小尖塔を、
死の都市を、光を発する氷の受胎不能な
数多くの塔と壁でくっきりとして。
いや、都市ではなく廃墟の洪水がそこにあり
それが空の境界からその永遠の川を
押し進める。巨大な松の木が
氷河の運命づけられた小径の上に散らばり、押しつぶされた地面に
枝をもがれ、粉みじんにされて立っている。
岩はむこうの最も遠い荒地から引きずり落され、
死者と生者の世界の境界を取り壊し、
二度と再生することはない。

昆虫、獣、鳥の住処はその洪水の略奪品となり、
その食物と非難所も永久に消え、
多くの生命と歓びは失われてしまった。人類は
恐怖で遠くに逃げ去り、その仕事と住居も
嵐に吹かれる煙のように消滅し、
それらの場所はわからなくなる。

この世のすべての創造物は死ぬが、「力」は死ぬことはない。サミュエル・ジョンソンの『辞書』を引いてみると、十八世紀には「力」(Power) にはDivinityという意味があることが分かる。ここでthisがイタリックになっているが、「このこと」を大地の表情は「山々が注意する精神」に教えてくれるのである。人間が自然の創造の中で経験するすべてのものと、人間の認識の限界を越えて存在する力との間には、どうしようもない隔たりがある。

モンブランの頂上には、「力」が「霜と太陽とが人間の力を嘲るかのように」死の都市を作った。詩人は「都市」という言葉を使ってしまい、「いや、都市ではなく廃墟の洪水」とすぐに否定する。都市という語では、抽象的で非人間的な「力」を人格化してしまうことになるからである。氷河は破壊しながら蛇が這うように下って行くが、氷河は「遠い陸地の息と血である」アルブ川の源泉でもある。

必然性の円環は永遠に変化する。円環は破壊と復活、創造と消滅の間で振動する。人間を含めて地球の創造者が常に経験するのは、この変化の円環である。

Below, vast caves
Shine in the rushing torrents' restless gleam,
Which from those secret chasms in tumult welling
Meet in the vale, and one majestic River,
The breath and blood of distant lands, for ever
Rolls its loud waters to the ocean-waves,
Breathes its swift vapours to the circling air.（ll. 120–126）

下の方では、巨大な洞窟が
突進する奔流の休みない閃光のなかで輝き、
その秘密の裂け目からごぼごぼと湧き出て
谷間で出会い、一つの巨大な川となる。
遠い陸地の息と血である大河は絶え間なく
その声高い水も大洋の波へと押し進め、
旋回する空気にその素早い蒸気を放つ。

第四連が必然性の円環と人間の生命との出会いを示したように、第五連はモンブランの不可視の頂上によって縮図となっている、その円環の源を検証する。「数多くの光景、数多くの響き、数多くの生と死」の究極の源である「力」がそこに宿っている。しかし山の頂上には光景も響きもない。物事の秘密の源は思想を統治し、「天の無限のドーム」

に対して「法としてあり」、人間の存在と些細な問題への関心を越えた彼方にあり、動いているようで動かないものとして在る。最終連である第五連はモンブランに対する讃美となっている。

Mont Blanc yet gleams on high: —the power is there,
The still and solemn power of many sights,
And many sounds, and much of life and death.
In the calm darkness of the moonless nights,
In the lone glare of day, the snows descend
Upon that Mountain; none beholds them there,
Nor when the flakes burn in the sinking sun,
Or the star-beams dart through them. —Winds contend
Silently there, and heap the snow with breath
Rapid and strong, but silently! Its home
The voiceless lightning in these solitudes
Keeps innocently, and like vapour broods
Over the snow. The secret Strength of things
Which governs thought, and to the infinite dome
Of Heaven is as a law, inhabits thee!

And what were thou, and earth, and stars, and sea,
If to the human mind's imaginings
Silence and solitude were vacancy?

モンブランはなおも高く輝く―力がそこに宿る、
数多くの光景、数多くの響き、
多くの生と死を司る静かで厳粛な力は
月のない夜の静かな闇の中でも、
昼の孤独な輝きの中でも、雪は山の上に降る。
そこで雪を見る者は誰もいないし、
雪片が夕日の中で輝く時も、
昼の閃光が雪の中を突き抜ける時も、
そこで風は静かに競い、息で雪を吹き寄せる、
素早く、力強く、だが静かに！　その家を
この孤独の中で無言の稲妻は
汚れなく摑み、蒸気のように
雪の上で思案する。事物の秘密の力は
思想を統治し、天の無限のドームに対して
法としてあり、汝に宿っているのだ。

そして汝も、大地も、星々も、海も何ものなのか。
もし人間の精神の想像にとって
沈黙と孤独とが空虚なものだとしたならば。

最後の三行はこの詩を山の高みから人間界に引き戻す修辞疑問となっている。宇宙の中の中心的な力は山の中に象徴されている。我々人間にとって象徴の重要性は人間の精神の想像の中にある。このことを前提として、もし沈黙と孤独が人間の精神にとって空虚なものだとしたら、人間は未知の敵意ある宇宙において疎外されていると感じたとしたら、人間は先へは進むことはできないのである。人間の想像力は雪の白さを映し出し屈折させ虹の美しい色に変え、生きている間は人間に喜びと、死を越えての生存の希望を与えるのである。

（付記）シェリーの詩の引用は Thomas Hutchinson (ed.), *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* (Oxford, 1961) による。

（英語英米文化化学科　教授）